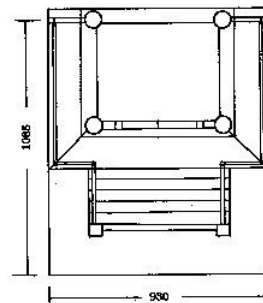


## 駒ヶ根市文化財

名称	秋葉神社本殿
種別	建造物
所在地	中沢中割
所有者	秋葉神社
説明	<p>社殿の構造及び形式は、一間社流(いつけんしゃながれ)造向拝唐破風付き、屋根は柿葺(こけらぶき)、垂木は扇垂木(おうぎだるき)となっている。母屋(もや)は円柱、向拝はケヤキの角柱、この柱に昇竜と降竜の彫刻がしてある。妻には猪目懸魚(いのめげぎょ)、棟には鬼板を置き、妻の大瓶束(たへいづか)にかわって雲形の彫刻に置替えているのが特徴である。大貫(たいぬき)(木鼻付)斗拱(ときょう)は和様の二手先(ふたてさき)、母屋と向拝は海老虹梁(こうりょう)でつなぐ。母屋正面中央に脇柱を立て、棧唐戸(さんからど)を入れ、その左右母屋柱との間に、彫刻の施された枳を置く。縁には擬宝珠勾欄(ぎぼうしゅこうらん)をめぐらし、袖障子には絵画が描かれていたが現在は剥落している。</p> <p>棟札によると、社殿は文政 2 年(1819)諏訪の小口直四郎が手がけたものである。直四郎は、立川流彫刻建築を頂点に到達させたといわれている二代和四郎富昌の弟子である。この社殿は小祠ではあるが一般的な社殿建築と変わらぬ本格的な手法に終始している。現在は簡単な鞘堂内に納まっているが虫害が甚だしいのが惜まれる。</p> <p>秋葉神社の由来については『中沢村誌』などによると、享保年中、当時の高見村において村の入費割付けをめぐって、村の名主層と農民の間に大きな争いがあった。また村で山林利用権などの問題をめぐっても長い間争いがあった。これらの問題がすべて円満解決したことを記念して、さらにはその頃、村の町通りに起こった大火の再発防止をも含めて、享保十一年(1726)神社を勧請したものだという。したがって現在の社殿はその後 93 年たってから建てられ、前宮と石段は、さらにその 30 年後に完成した。</p>



秋葉神社平面図